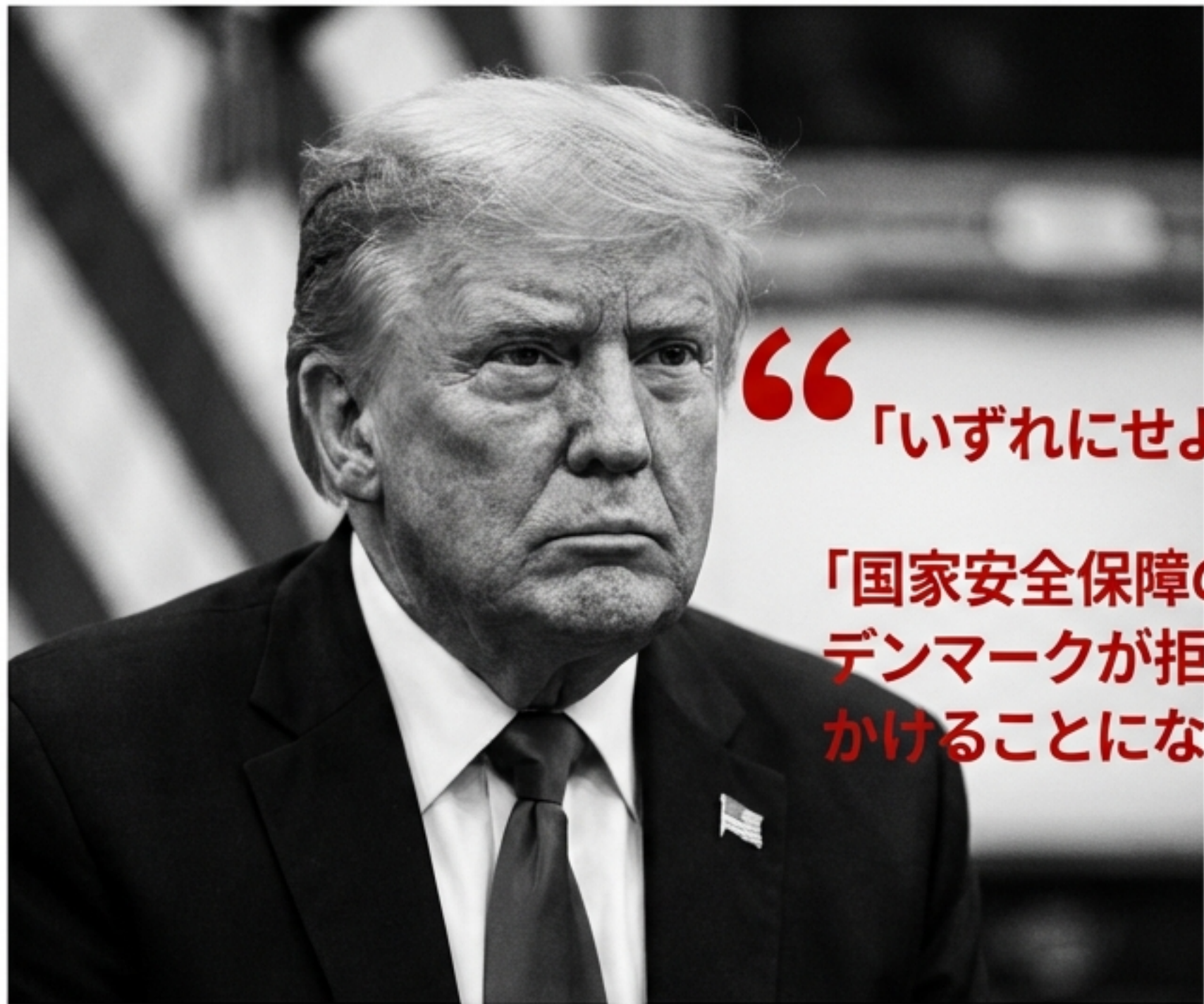




世界最大の島、グリーンランド争奪戦

なぜアメリカは、同盟国を脅してまでこの「氷の島」を欲しがるのか？



“「いずれにせよ、我々は手に入れる」

「国家安全保障のために絶対に必要なのだ。
デンマークが拒むなら、彼らに高関税を
かけることになるだろう」

”



2025年の衝撃

トランプ大統領が再びグリーンランド購入・併合の意思を表明。これは冗談ではない。

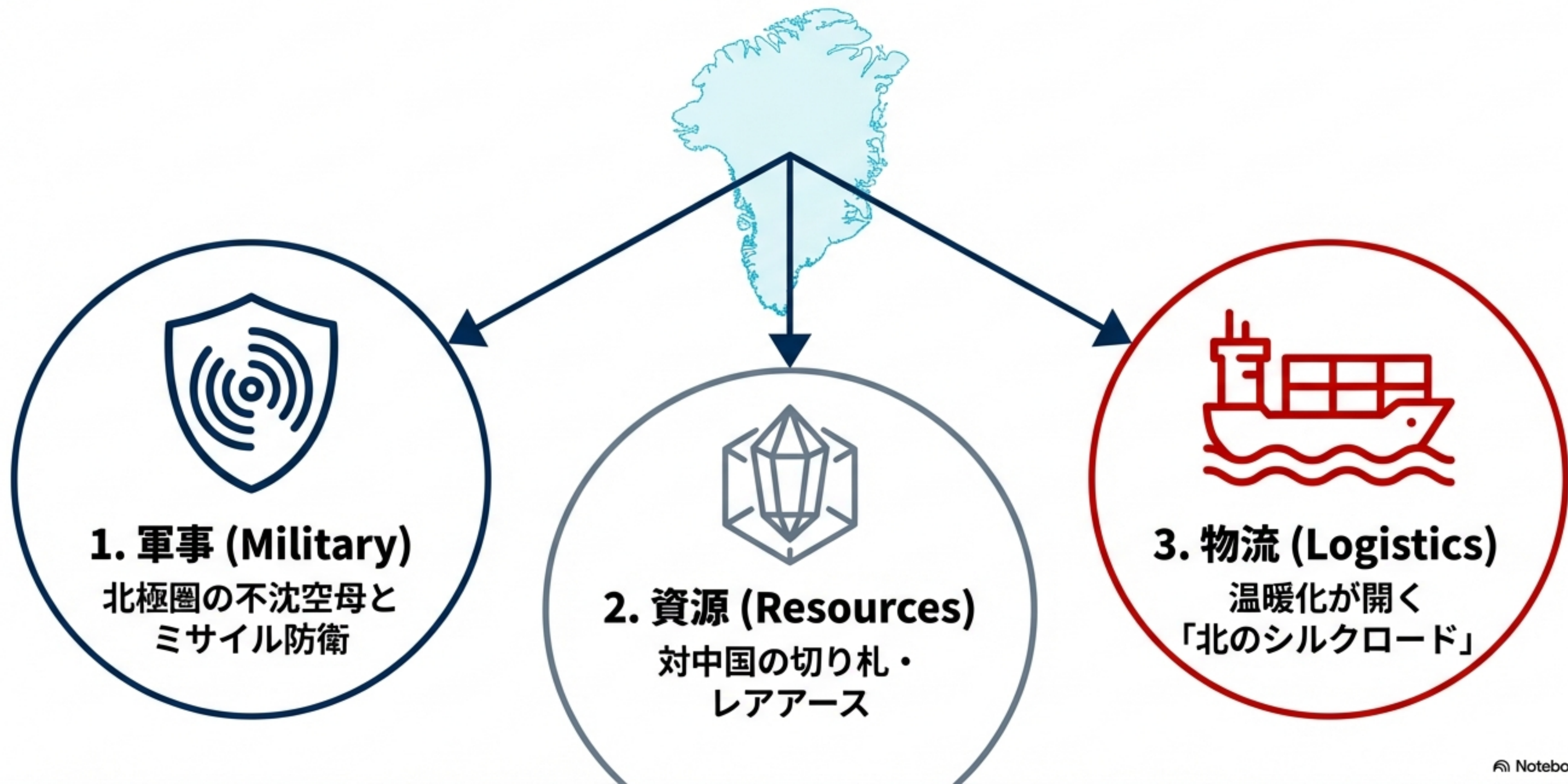
歴史的背景

1867年(国務長官スワード)、1946年(トルーマン大統領による金1億ドルでのオファー)に続く、米国の長年の悲願。

突きつけられた選択

「買収」か、それとも「実力行使」か。NATO同盟国であるデンマークに対し、かつてない圧力がかかっている。

アメリカが狙う「3つの覇権」



理由① 軍事：アメリカ本土を守る「最北の砦」



ピトゥフィク宇宙軍基地 (Pituffik Space Base)

旧トゥーレ空軍基地。北極圏から750マイル北に位置する米軍最北の基地。

役割

ロシアからのICBM（大陸間弾道ミサイル）を探知する「目」と「耳」。ここを失えばアメリカは北からの攻撃に対して盲目になる。

GIUKギャップ

グリーンランド・アイスランド・英国を結ぶ海域。ロシア潜水艦が大西洋に進出するのを封じ込めるための戦略的チョークポイント。

迫り来る脅威：北極は「空白地帯」ではない

ロシアの要塞化

北極圏に50以上の基地を運用。世界最強の砕氷船団を保有し、軍事プレゼンスを拡大。



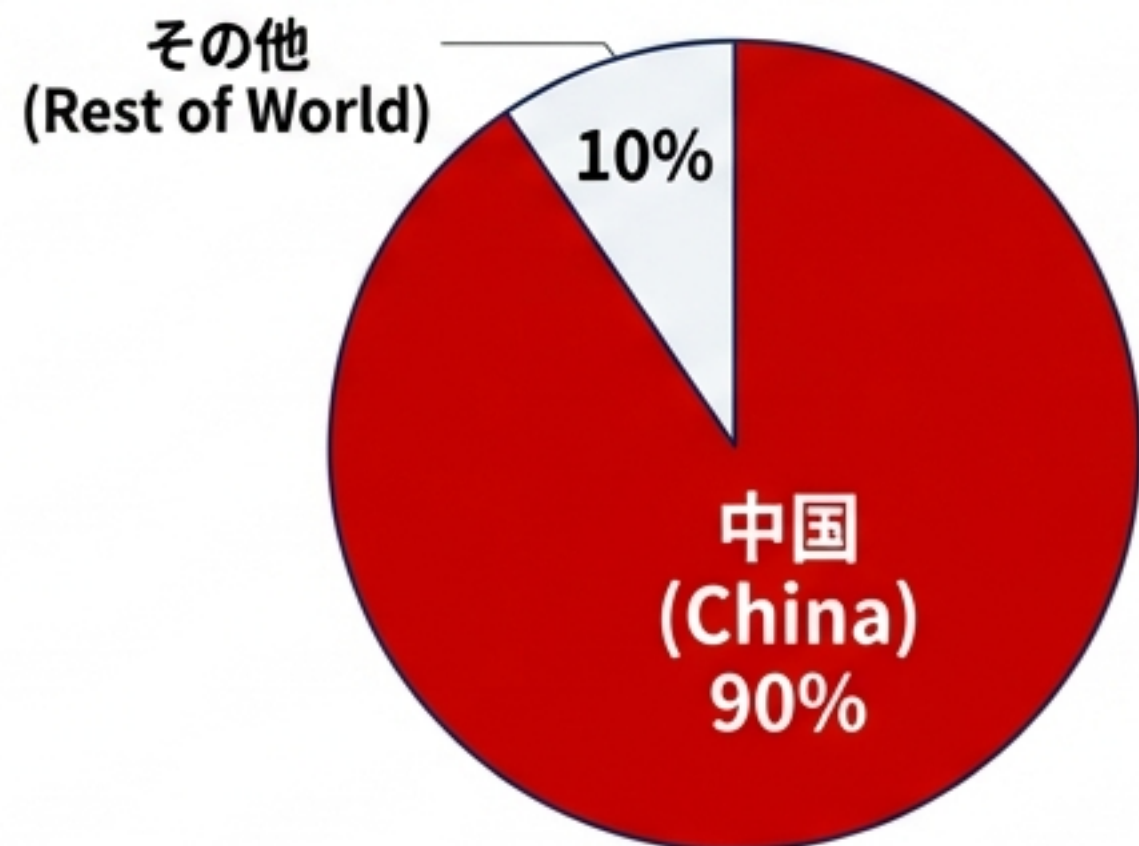
中国の野望

自らを「近北極国家 (Near-Arctic State)」と定義。「氷上のシルクロード」構想のもと、空港やインフラへの投資を画策（例：2018年の空港建設入札）。

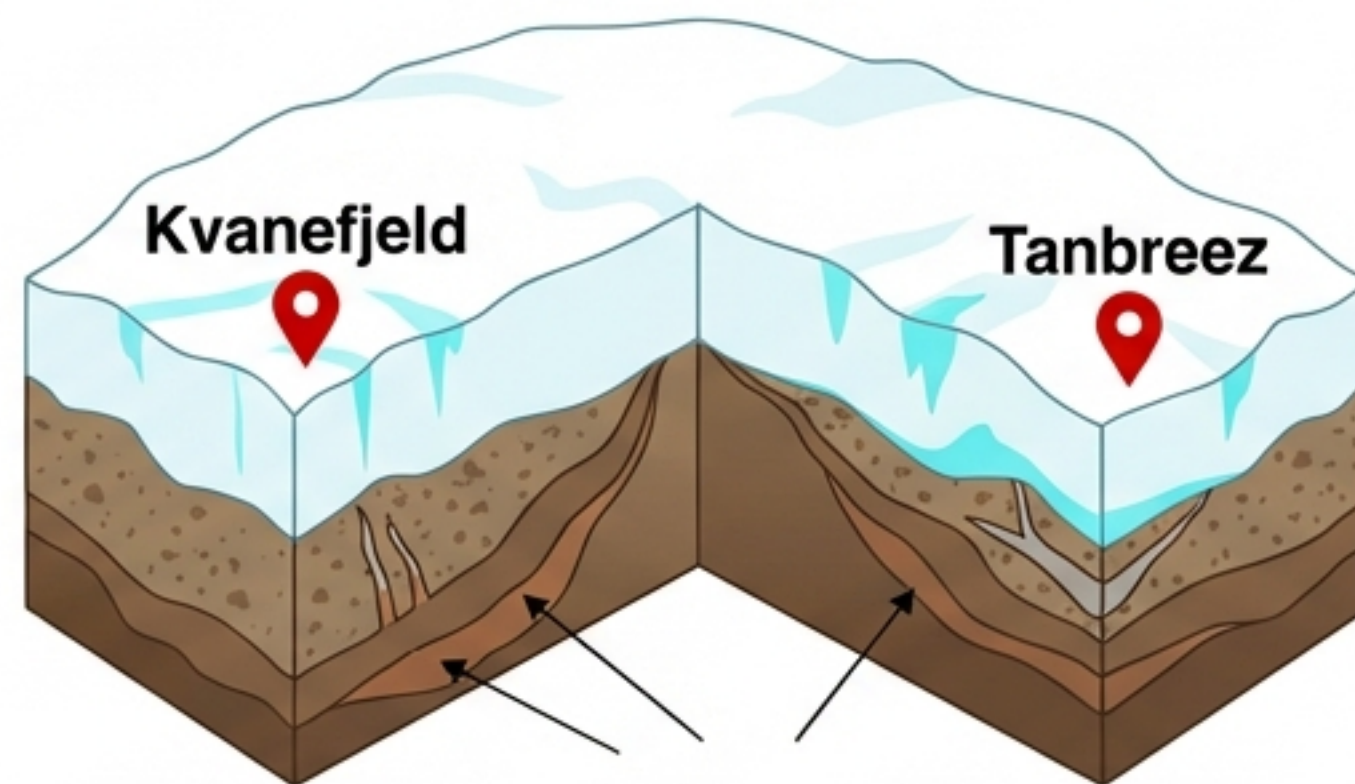
「我々がやらなければ、中国かロシアがやる」(米国務省)

理由② 資源：ハイテク産業の命運を握る「レアアース」

世界のレアアース処理シェア



グリーンランドの鉱床



世界8位の埋蔵量：推定150万トン。未探査地域を含めれば世界2位の可能性も。

戦略物資：EV（電気自動車）、F-35戦闘機、AIハードウェアに不可欠なジスプロシウムやネオジムが眠る。

脱・中国依存：現在、レアアース供給の約90%を中国が支配。グリーンランドは、中国の輸出規制に対抗する唯一の「切り札」となり得る。

シリコンバレーも参戦：AI × 鉱山開発



KoBold Metals

ビル・ゲイツやジェフ・ベゾスが出資する探査企業。AIを使ってグリーンランドの氷の下にある重要鉱物を探している。

なぜ彼らなのか？

AI革命と再エネ革命には、大量の銅（Copper）とリチウムが必要。

結論：これは単なる国家間の争いではなく、次世代テクノロジーの覇権争いでもある。

理由③ 物流：温暖化が開く「黄金の航路」



距離の短縮：アジア～欧州間の輸送日数を最大40%削減。

戦略的価値：氷が溶けることで、グリーンランドは世界の物流ハブ（「北のパナマ運河」）になる可能性がある。

「売り物ではない」：デンマークと現地の抵抗



主権の問題

グリーンランドは自治権を持つ。「ビジネスは歓迎するが、国は売らない」(デンマーク首相)。

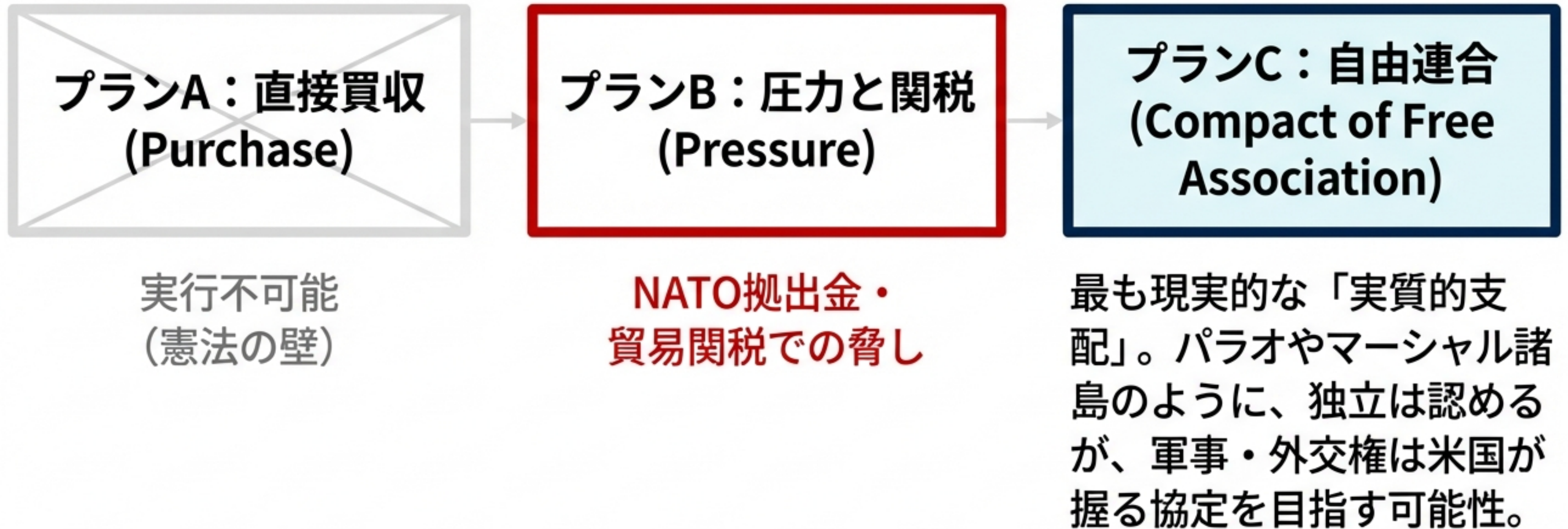
環境への懸念

現地政府(イヌイット・アタカティギット党)は、ウラン採掘禁止法を制定(2021年)。これがレアアース開発(Kvanefjeld鉱山)の障害となっている。

独立へのジレンマ

デンマークからの独立は望むが、アメリカの一部になることは望んでいない(世論調査で85%が反対)。

どうやって手に入れる？トランプの「ディール」戦術



結論：これは単なる不動産取引ではない



「安全保障の要」

ロシアのミサイルに対する防衛線。



「経済安保の盾」

中国のレアアース支配を打破する供給源。



「未来への投資」

北極海航路という次世代の物流支配。



「米国の論理」

「グリーンランドの喪失は、北米大陸の安全保障上の致命傷になる」。

米国にとって、これは「欲しい(Want)」ではなく「必要(Need)」なのだ。

北極海が「次の地中海」になる日



氷が溶けるにつれ、この島の価値は上がり、争奪戦はさらに熱を帯びる。
グリーンランドの行方は、21世紀の覇権がどこにあるかを占う試金石となるだろう。